

選評 2024年3月 杉本真維子

「どの予感も的中しない本能の／よくないところ・よいところ」由良伊織（東京都）
的中しない、という猶予が意味するところのものが、指し示されています。「よくないところ・よいところ」という受け方も秀逸です。

「恥じらいもかわいいでしょう／撫でて 雪」吉沢 美香（宮城県）
撫でて、といっているのは「雪」でしょうか。ここにあるかわいらしきは吉沢さんにしか書けないものだと思います。

「ところてんのように連なる桜／救急搬送してるみたいな花見準備」しろとくろ（東京都）
安穩と不穩がちぐはぐに編みこまれていて、ふしぎな視界が生まれています。

「にんじんの裏ごししつつ／更けていく／夜のすべてを子のためにして」睦月 雪花（愛知県）
ひたむきさ、というものが、外堀を埋めるように書き込まれています。

「初蛙／ アイデンティティ／ アイデンティティ」日下部 友奏（大阪府）
跳躍高が、アイデンティティと名づけられているようで、面白いです。しかも2回も(!)。

「目覚ましの要らない朝の底にいて／オーイと深海から叫んだ」五月閉じ花（北海道）
「朝の底」へ降り立つのは睡眠と覚醒のはざまなんですね。枕の下にはやはり深い海がありそうです。

「さらさらと持たざる者を試す雨」中村 航太（福岡県）
「さらさら」というオノマトペが伝える摩擦抵抗の少なさ。そこから「持たざる者」を生み出すとは巧みです。

「注釈のいらぬ過去を話すとき／ふたりの間にあるながい川」羽水繭（大阪府）
「ながい川」がふたりの歴史なのでしょうか。「注釈のいらぬ過去」とはなんとも素敵です。

「人々が愛おしくなっても／ボク、一人 そっぽを向いた。／スープがあったから」五代康成（埼玉県）
あたかもスープに突き動かされたかのように書かれていますが、そうではありません。愛の力も、食欲の力も、十分に知った上で、意志的に「そっぽを向」いているのです。

「春の雨新幹線を撫でてゆく／必死に泳ぐ精子のように」うたた（岡山県）
水の命まで見抜いた結果がすぐれた喩をつかみとっています。

新しい書き手がさらに増えてきていますね。次回もお待ちしています。